

第 5 回市史講座ミニレポート：令和元年 8 月 17 日（土）

「松江藩の支城城下町-富田・三刀屋・赤名-」

松尾信裕先生（大阪歴史博物館研究主幹）



今回の講座では、大阪歴史博物館の松尾信裕先生に、これまで現地調査してこれられた松江藩の支城城下町と日本各地の城下町を比較してお話いただきました。

これまで、松尾先生は、「出雲国図」（寛永 10 年（1633）作製）に「古城」と記載されている富田・三刀屋・赤名・亀嵩・三沢に形成されていた城下町について現地調査をされてきました。

講座でははじめに、城下町の構造の変遷についてお話いただきました。戦国期城下町は山城＋山麓居館＋武家屋敷地＋直属商工業者屋敷という構造が共通していました。この時期は、主従関係のない職商人（しょくあきんど）の町は「市町（いちまち）」、「宿町（やどまち）」として居館や武家地から離れて存在していました。

織田信長の登場によって、城下町の形が求心的な豎町型城下町（町人地の通りが城に向かって縦方向）に変化していき、また、経済活動が行いやすい港に近い平野部に城下町が移動しました。豊臣秀吉の時期になると、より大きな町が出現し、城下町の形も豎町型から、物流のための横町型城下町（町人地の通りが城に平行）へと変化していきました。その後、関ヶ原合戦（慶長 5 年〔1600〕）後に築かれた城下町は長方形の街区が採用されて、敷地の奥行きが同じ横町方町人地へと変化していきました。

次に、現地調査された出雲国内の富田・三刀屋・赤名・亀嵩・三沢城の城下についてお話しいただきました。富田には、山麓に武家屋敷や町人地があったと推定できましたが、堀尾氏の松江城築城に伴う移転や寛文 6 年(1666)の飯梨川の氾濫によって消滅しました。洪水で残った 5 町を川の西に移転させ、現在の広瀬町が出来ました。三刀屋は、元和元年の一国一城令によって、三刀屋城廃城後の寛永期に建設された町で、それ以前の三刀屋は移転を繰り返し、現在の町の地下に埋もれています。赤名は瀬戸山城とともに堀尾期の姿を現在にとどめています。町は銀山街道に面した西側町で、館や武家地も城の麓に存在していました。この様に富田・三刀屋・赤名は、現地調査からも松江藩の支城城下町であったことが認められるということです。

また、三沢は中世からの市町、亀嵩は近世初めに出現した両側町で、共に在郷町として今日まで存続したようです。

これまで松江城部会の先生方には、松江市史講座で様々なテーマでお話しいただいていますが、松江藩の支城についてお話しいただいたのは初めてでした。

松江藩の支城城下町と同じく近世初頭に建設された日本各地の城下町も数多く取り上げて城下町の構造や特徴を紹介していただきました。